日本呉音の“核母音”

林　　史　典

0

いま仮に日本呉音の“核母音”と呼ぶのは，ka（加），kjaũ（敬），kai（皆）等のa, ni（耳），nin（人），niu（柔）等のｉの位置に立つ母音であって，中古漢語の主母音すなわちIMVF/Tのｖではない。この“核母音”は，日本呉音における第一拍目の母音を形成し，且つ原音の(M)Vが概略これに対応する。

遇摂における「住ヂウ」「乳ニウ」等の-iuについては，原則的にｕが原音のＶに対応していると認められるが，流摂の「昼チウ」「柔ニウ」，通摂の「中チウ」「龍リウ」等との関連から，ｉをもって“核母音”に該当させることにする。無論，このようなｕを考察の対象から除外することはしない。

「傾クキャウ」「栄キャウ」の類も，開口の「軽キャウ」「定ヂャウ」などによって，ａを“核母音”とする。

小論で日本呉音と称するものの実際は，法華経の伝統的な読誦音である。このような読誦音の伝統が成立する時期は必ずしも明らかでないが，平安時代の末期以後は，諸文献を通じてその字音を体系的に取り扱うことが可能であり，また，伝承過程についてもある程度これを問題にすることができる。

もっとも，法華経の読誦音は，それ自体純粋な体系を示していない。呉音系字音の複層的な性格に加えて，文献による小異もあるし，漢音系字音の混入も許している。伝承のあり方に関して言えば，もともと，漢音的な特徴を潔癖に排除することによって呉音的な特徴を保存するという風なものではなかったらしい。このような点では他の仏典も同様で，漢音系の読誦音さえ，呉音的な読み癖を含む例がめずらしくない。

そこで，問題となる字音についてはあらかじめそれを取り上げて検討を加えるのが順序であるが，小論では，煩を避けるために敢えてこれを省くことにする。

1

さて，この“核母音”が原音の主母音を反映するものであることは言うまでもないが，その姿は，さまざまな条件に左右されている。

例えば，既に指摘されているように[1]，深摂（侵韻[2]）および臻摂（真・欣韻）の母音 i，o が介母 －i̯－，－ï̯－ の差に対応している。

深摂　－i̯－　沈チム　賃ニム　林リム　臨リム　心シム　侵シム　深ジム　任ニム　習シフ　入ニフ……

　　－ï̯－　品ホム　稟ホム　今コム　金コム　音オム　飲オム　邑オフ……（cf. 琴キム　禽キム　禁キム　及キフ　急キフ……）

臻摂　－i̯－　賓ヒン　民ミン　珍チン　忍ニン　隣リン　緊キン　因イン　新シン　質シチ　日ニチ……

　　－ï̯－　筋コン　銀ゴン　勤ゴン　近ゴン　欣ゴン　乞コチ……（cf. 貧ビン　愍ミン　筆ヒチ　密ミチ　瑟シチ……）

とは言っても，－ï̯－を持つ諸字のあるものが o の母音をとり，あるものが i の母音を表す理由は明確ではない。臻摂で o を示すのは牙喉音であるが，深摂にははっきりした傾向が認め難い。唇音に至っては，深摂と臻摂で現れ方がちょうど逆になっている。これが原音のVの差を反映するようである。

韻尾も“核母音”と無関係ではない。例えば，曾摂（蒸韻）は次の如くであり，

曾摂　－i̯－　陵リョウ　称ショウ　勝ショウ　昇ショウ　証ショウ　乗ジョウ　承ジョウ……（cf. 勅チョク）

　　直チキ　力リキ　式シキ　識シキ　飾シキ　食ジキ……

　　即ソク　息ソク

　　－ï̯－　興コウ　矜コウ　応オウ　側ソク　棘コク　極ゴク　億オク　憶オク　臆オク……

　　色シキ　測シキ

これは次のように解せられる。

－i̯－{ 陽類　－joũ
　　入類　－iki

－ï̯－{ 陽類　－oũ
　　入類　－oku

すなわち，陽類（－ng′）では －i̯－ が拗音で現れるのに対して，所謂乙類の中舌的な －ï̯－ は失われている。一方，入声では －i̯－ が母音 i を生ずるのに対

して，－ï－ の方はoを表している。介母の差を反映するという点で，これも，陽類と並行した現象である。曽摂の牙喉音および唇音には事実上甲類の前舌的な －i̯－ を持つ諸字が存在しないところから，-iki の形式，特にその第一母音は，－i̯－ の特徴が coronal の子音との結合によって保存されるために生じた pattern であろうと推定される。勿論 -iki の第二母音も，-k′ の口蓋的な特徴が第一母音との調和において保存された結果に他ならない。いずれにしても，－ï－ が陽類，入類のちがいを問わず失われるのに対して，－i̯－ は陽類で拗音，入類でiの母音のかたちをとって保存されている。ただし，－i̯－ を持つ諸字における陽類と入類の差は説明が難しい。以上の原則に矛盾するのは，歯音の「即ック」「息ック」「色シキ」「測シキ」等と，「勅チョク」とである。後者は漢音系字音の混入と考えられるが，歯音に関しては他の諸事実を参照しなければならない。

介母（M）との関連では，蟹，止，咸，深，山，臻および效の諸摂に拗音が存在しないのも注目すべき点である。臻摂合口を除いて，一般に日本字音が前寄りの韻尾（－i，-m～-p，-n～-t）の前で拗音を出さないのは，Mとそれに続くVが，まさにそのような環境において，母音のeやiなどとして聞きとられたためである。かくして，咸摂・山摂のⅢ（甲）韻[3]は，梗摂との間に次のような関係を成立させている。

		＜中古音＞	＜日本呉音＞
外転	梗摂（清～昔）	-i̯äng′ ～ -i̯äk′	-jaũ ～ -jaku (ex. 清シャウ　成ジャウ　軽キャウ　名ミャウ　石シャク　益ヤク……)
	咸摂（塩～葉）	-i̯äm ～ -i̯äp	-em ～ -eΦu (ex. 塩エム　険ケム　漸ゼム　接セフ　獵レフ……)
	山摂（仙～薛）	-i̯än ～ -i̯ät	-en ～ -et (ex. 仙セン　然ネン　便ベン　遣ケン　舌ゼチ　熱ネチ……)

深摂・止摂と曽摂の，次のような関係もこれに等しい。

		＜中古音＞	＜日本呉音＞
内転	曽摂（蒸～職）	-i̯əng′ ～ -i̯ək′	-joũ ～ -iki (ex. 陵リョウ　称ショウ　勝ショウ　乗ジョウ　直ヂキ　力リキ……)
	深摂（侵～緝）	-i̯əm ～ -i̯əp	-im ～ -iΦu (ex. 沈ヂム　林リム　心シム　任ニム　習シフ　入ニフ……)
	止摂（之）	-i̯əi	-i (ex. 之シ　思シ　時ジ　治ヂ　以イ　里リ……)

韻尾 -m～-p, -n～-t を有するこれらのⅢ（甲）韻の“核母音”は，-ng′～-k′ を有する諸字のそれときわめて対照的である。

以上のように，日本呉音の“核母音”は，介母や韻尾，そしてしばしば頭子音の性格までをも反映して，原音との間に一種の類型的対応を成立させている。日本呉音の体系的特徴，とりわけVを中核とするMVFとの対応を理解するためには，まず，事実を巨視的に把握する必要がある。以下は，このような視点に立った鳥瞰であって，日本呉音の細部を考察するものではない。

2

河野六郎の所謂A韻類（外転）[4] の“核母音”は，厳・凡韻（咸摂）および元韻（山摂）と江韻（宕摂Ⅱ）がoを示すのを除くと，aあるいはeで現れる。合口の状態も開口と異ならない。そして，“核母音”に関するかぎり，ここに属する諸摂には，次のような三つのタイプが認められる。

(1)　果(仮)摂　梗摂　宕(江)摂
(2)　效摂　咸摂　山摂
(3)　蟹摂

まず(1)は，次のように，Ⅰ～Ⅳを通じてaを出すのが特徴的である。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ甲	Ⅲ乙	Ⅳ
果（仮）摂	-a	-e, -a	-a	-a	
梗　摂		-a-	-a-	-a-	-a-
宕（江）摂	-a-	(江)-a-, -o-	-a-	-a-	

Ⅰ～Ⅳを通してaが現れるのは，例えば，

果（仮）	Ⅰ	-a	阿$_{ア}$　多$_{タ}$　那$_{ナ}$　羅$_{ラ}$　佐$_{サ}$　波$_{ハ}$　座$_{ザ}$　堕$_{ダ}$　和$_{ワ}$　火$_{クワ}$……
	Ⅱ	-e	家$_{ケ}$　下$_{ゲ}$　牙$_{ゲ}$　仮$_{ケ}$　馬$_{メ}$　価$_{ケ}$　華$_{クエ}$　化$_{クエ}$……
		-a	加$_{カ}$　枷$_{カ}$　駕$_{カ}$　吒$_{タ}$　茶$_{ダ}$　把$_{ハ}$　叉$_{シャ}$　沙$_{シャ}$　寡$_{クワ}$　瓦$_{グワ}$……
	Ⅲ甲	-a	車$_{シャ}$　斜$_{シャ}$　者$_{シャ}$　邪$_{ジャ}$　夜$_{ヤ}$　野$_{ヤ}$　也$_{ヤ}$　耶$_{ヤ}$……
	Ⅲ乙	-a	迦$_{カ}$　伽$_{カ}$　佉$_{カ}$
梗	Ⅱ	-a-	盲$_{マウ}$　幸$_{カウ}$　宅$_{タク}$　額$_{カク}$　更$_{キャウ}$　行$_{ギャウ}$　争$_{シャウ}$　百$_{ヒャク}$　客$_{キャク}$　責$_{シャク}$……
	Ⅲ甲	-a-	名$_{ミャウ}$　領$_{リャウ}$　軽$_{キャウ}$　声$_{シャウ}$　静$_{ジャウ}$　成$_{ジャウ}$　益$_{ヤク}$

			石シャク 傾クキャウ 営キャウ……
	Ⅲ乙	-a-	平ヒャウ 病ビャウ 明ミャウ 敬キャウ 驚キャウ 逆ギャク 劇ギャク 永キャウ 栄キャウ……
	Ⅳ	-a-	冥ミャウ 並ビャウ 打チャウ 定ヂャウ 令リャウ 経キャウ 形ギャウ 青シャウ 歴リャク 撃ギャク……
宕（江）	Ⅰ	-a-	当タウ 湯タウ 唐タウ 堂ダウ 浪ラウ 倉サウ 各カク 落ラク 光クワウ 黄クワウ……
	Ⅱ	-a-	講カウ 巷カウ 江ガウ 降ガウ 角カク 学ガク 覚カク 爆バク 藐ミャク……
		-o-	窓ソウ 幢ドウ 撲ボク……
	Ⅲ甲	-a-	長チャウ 場ヂャウ 涼リャウ 羊ヤウ 商シャウ 常ジャウ 略リャク 脚キャク 相サウ 良ラウ……
	Ⅲ乙	-a-	方ハウ・ホウ 放ハウ 房バウ 忘マウ 望マウ 香カウ 仰ガウ 央アウ 王ワウ……

のように，Ⅱ以下に拗音 -ja, -jaũ ～ -jaku を有し，また，-i̯- あるいは -i̯- を失ったかたちを -a, -aũ ～ -aku として現すからである（合口も並行的な関係にある）。かくして，外転の諸摂には，この(1)のほか拗音 -j- が存在しない。

果（仮）摂Ⅱの -a は漢音と同じかたちであるが，-e と -a が異なる stratum を示すのか否かには慎重な検討を要する。少なくとも，次の点には注意しなければならない。すなわち，外転の諸摂は，Ⅲ～Ⅳを拗音で現すだけでなくⅡも多くが拗音で現れる梗摂と，内転的特徴を保存する江摂とを除くと，すべてのⅡにeが存在する。しかし，その性質は必ずしも同じではない。例えば，(2)の效・咸・山摂では，Ⅱのeが Ⅲ～Ⅳのeと同様の現れ方をするのに対し，(3)蟹摂Ⅱのeは単母音化の結果であって，Ⅲ～Ⅳにおける「制セイ」「弊ヘイ」「低テイ」「継ケイ」のような -ei 型のe ではない。これに対して，果摂では，Ⅱのあるものを -e で出し，またあるものを -a で現すとともに，Ⅲ甲とⅢ乙は，-ja と -a で区別しており，Ⅲ甲・Ⅲ乙にeを存在させない。

(2)の效・咸・山摂では，(1)と異なって，Ⅲ～Ⅳにeが現れる。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ甲	Ⅲ乙	Ⅳ
效摂	-a-, (f→-o-)	-e-, -a-	-e-	-e-	-e-
咸摂	-a-(-o-)	-e-, -a-	-e-	-e-	-e-
山摂	-a-	-e-, -a-	-e-	-e-	-e-

次にその例を挙げよう。

效	Ⅰ	-a-	刀タウ 道ダウ 腦ナウ 労ラウ 好カウ 高カウ 豪ガウ 草サウ 造ザウ 奥アウ……
		-o-	宝ホウ 報ホウ 保ホウ 毛モウ……
	Ⅱ	-e-	教ケウ 孝ケウ 交ケウ 校ケウ 巧ゲウ 抄セウ 貌メウ 鐃ネウ……
		-a-	泡ハウ 飽ハウ 爪サウ
	Ⅲ甲	-e-	小セウ 少セウ 消セウ 照セウ 妙メウ 要エウ 曜エウ 遙エウ 超テウ 療レウ……
	Ⅲ乙	-e-	憍ケウ 表ヘウ 苗メウ 廟メウ……
	Ⅳ	-e-	暁ケウ 漂ヘウ 蕭セウ 調デウ 彫テウ 尿ネウ 了レウ……
咸	Ⅰ	-a-	感カム 堪カム 男ナム 南ナム 三サム 慙ザム 藍ラム 合ガフ 答タフ 雑ザフ……
		-o-	紺コム 貪トム 曇ドム
	Ⅱ	-e-	咸ゲム 減ゲム 狹ケフ 嗟セフ 壓エフ……
		-a-	甲カフ 洽カフ……
	Ⅲ甲	-e-	塩エム 焔エム 漸ゼム 接セフ 葉エフ・セフ 摂セフ 獵レフ……
	Ⅲ乙	-e-	険ケム 撿ケム 嶮ケム
	Ⅳ	-e-	兼ケム 嫌ケム 謙ケム 点テム 念ネム 氈デフ……
山	Ⅰ	-a-	漢カン 短タン 難ナン 残ザン 散サン 案アン 官クワン 丸グワン
		-a-	達ダチ 末マチ……
	Ⅱ	-e-	眼ゲン 限ゲン 間ケン 山セン 産セン 関クエン 還グエン 刹セチ 殺セチ……
		-a-	艱カン 八ハチ 察サチ
	Ⅲ甲	-e-	遣ケン 仙セン 浅セン 便ベン 展テン 連レン 縁エン 滅メチ 舌ゼチ 熱ネチ……
	Ⅲ乙	-e-	乾ケン 辯ベン 勉メン 変ヘン 撰セン 圓エン 眷クエン 別ベチ……
	Ⅳ	-e-	見ケン 現ゲン 天テン 田デン 蓮レン 千セン 衒クエン 結ケチ 涅ネチ 血クエチ……

效摂Ⅰ唇音のoは，有坂秀世の明らかにした通りである[5]。また，咸摂Ⅰでは覃韻にoが現れる。これも河野の指摘するように[6]，覃韻の古い特徴が保存されたものであろう。そのほか，山摂（仙韻）合口Ⅲ乙の「巻クワン」「権ゴン」などのような，散発的な例を除くと，やはり(2)は，Ⅰのaに対するⅢ～Ⅳのeが特徴的である。Ⅱにはeとaが現れるが，明らかにeが優勢で，(1)でもⅡにしばしば拗音が現れるのと同様，このような共存はⅡ韻の性格を示している。

外転で，-ng′～-k′，-ng～-k がeを生まないことと，-m～-p，-n～-t が拗音を持たないこととは，無関係ではない。その意味で，eは，Ⅲ～Ⅳの特徴を写すための，拗音に対する一方の手段である。

なお，咸摂の厳・凡韻，山摂の元韻は次のような内転的な現れ方をする。

厳　Ⅲ乙　-o-　厳ゴム　業ゴフ　劫コフ

凡　Ⅲ乙　-o-　凡ボム　犯ボム　梵ボム　法ホフ　乏ボフ

山　Ⅲ乙　-o-　建コン　健ゴン　言ゴン　園ヲン　遠ヲン　怨ヲン　反ホン　煩ボン　越ヲチ
　　発ホチ……

　　-a-　万マン　願グワン　勧クワン　竭カチ　罰バチ　曰ワチ　月グワチ……

　　-e-　幰ケン　原グエン　券クエン　宛エン　返ヘン……

(1)，(2)に比べて，(3)の蟹摂は少し複雑である。

蟹　Ⅰ　-e　礙ゲ　悔クエ　外グエ　会エ……

　　-a-　海カイ　開カイ　怠タイ　大ダイ　来ライ　災サイ　材ザイ　毎マイ　背ハイ
　　憤クワイ……

　　Ⅱ　-e　芥ケ　解ゲ　懈ゲ　快クエ　怪クエ　壊エ　画エ……

　　-a-　皆カイ　界カイ　戒カイ　械カイ　崖ガイ　齜サイ　隘アイ　排ハイ　敗ハイ
　　売マイ……

　　Ⅲ甲　-e　世セ

　　-a-　際サイ　歳サイ

　　-e-　制セイ　勢セイ　誓セイ　嬰エイ　弊ヘイ　鋭エイ……

　　Ⅲ乙　-e　偈ケ　衛エ

　　Ⅳ　-e　計ケ　稽ケ　繋ケ　弟デ　慧エ……

　　-a-　帝ダイ　提ダイ　第ダイ　礼ライ　西サイ　妻サイ　済サイ　米マイ……

　　-e-　詣ケイ　継ケイ　啓ケイ　低テイ　禰ネイ　隷レイ　閉ヘイ　迷メイ……

これらについて，単母音化した -e のかたちを最も古い層，漢音と同じかたちを示すものを最新の層と考えれば，次のような stratification が可能である[7]。

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ甲	Ⅲ乙	Ⅳ
古　層	-e	-e	-e	-e	-e
中間層	-ai	-ai	-ei	(-ei)	-ai
新　層	-ai	-ai	-ei	(-ei)	-ei

合口Ⅰの「堆ツイ」「内ヌイ」「対ツイ」あるいはⅢ甲の「際サイ」「歳サイ」などは，独自の検討を要するとしても，中間層Ⅳの -ai は，Ⅳ が Ⅲ甲 に合流する以前の状態を反映するものと考えられよう。ただ，このような stratification は，

随所に認められるというわけでなく，また，他の事象との synchronize も簡単ではない。例えば，匣母合口の w- は，蟹摂に関するかぎり古層の -e にしか認められないが，廣州方言のように，匣母合口を原則的に w- で出す方言が存在すること，北京方言や朝鮮字音などでも「完 uan, 'wan」のように，γ- を落す例があることなどを考え合わせると，匣母合口の w- が，蟹摂の -e に相当する日本呉音の古層に属するものであると速断するには疑問が生ずる。

3

河野のB韻類（内転）には，o, u, i などの“核母音”が現れる。止摂の一部や幽韻には e が現れるが，a は存在しない。開口と合口とでも異なり，概してA韻類（外転）のようなきれいな類別を示さない。しかし，韻尾との関連に注目すると，外転の諸摂と概略並行した関係をとらえることが可能であり，次の三つのタイプが認められる。

(1)　曾摂　通摂
(2)　止摂　深摂　臻摂
(3)　遇摂　流摂

(1)は喉内韻尾を有する群で，Ⅰ～Ⅲを通じて o が現れる。

		Ⅰ	Ⅲ甲	Ⅲ乙
曾摂		-o-	-o-, -i-	-o-, -i-
通摂	(東)	-o-, -u-, -ũ	-o-, -u-, -ũ, -i-	-o-, -u-, -ũ, -i-
	(冬・鍾)	-o-, -u-	-o-, -u-, -ũ, -i-	-o-, -ũ

曾摂は，Ⅰの開口に「恒ガウ・ゴウ」，合口に「弘グウ」「或ワク」「惑ワク」など，問題となる文字があるとしても，全体としては単純で，Ⅰは

曾　Ⅰ　-o-　肯コウ　等トウ　燈トウ　僧ソウ　増ソウ　崩ホウ　黒コク　得トク　則ソク　黙モク……

のように圧倒的に o，Ⅲも，先に掲げたように，入声以外は o を現す。これに対する通摂は，

通　Ⅰ（東）　-o-　東トウ　同ドウ　動ドウ　送ソウ　叢ソウ　谷コク　独ドク　読ドク　速ソク　目モク……
　　-u-　空クウ　通ツウ　痛ツウ
　　-ũ　功ク　孔ク　夢ム　蒙ム　蓬ブ……
　Ⅲ甲(東)　-o-　六ロク　陸ロク

	-u-	衆(シュ)シュウ　終ジュウ　充ジュウ　宿シュク　熟ジュク……
	-ũ	衆シュ(シュウ)
	-i-	中チウ　虫チウ　育イク　竹チク　肉ニク　叔シク　夙シク……
Ⅲ乙(東)	-o-	雄ヲウ
	-u-	宮クウ　風フウ　諷フウ　福フク　伏ブク　縮シュク……
	-ũ	躬グ　窮グ　豊ブ
	-i-	郁イク　掬キク　閾シク
Ⅰ(冬)	-o-	膿ノウ　告(ガウ)コク　毒ドク　褥ノク
	-u-	宗シュウ
Ⅲ甲(鍾)	-o-	用ヨウ　容ヨウ　悚ショウ　欲ヨク　浴ヨク　足ソク　続ゾク　囑ゾク　俗ゾク……
	-u-	種シュウ　腫シュウ　鐘(シュ)シュウ　従ジュウ　縦ジュウ　誦ジュウ……
	-ũ	勇ユ　踊ユ　涌ユ　鐘シュ(シュウ)……
	-i-	重ヂウ　龍リウ　蓐ニク　褥ニク　逐チク……
Ⅲ乙(鍾)	-o-	擁ヲウ　癰ヲウ
	-ũ	供ク　恭ク　凶ク　恐ク　共グ　奉ブ　峯ブ……

のごとくであって，-ũ の型をuの変種とみなせば，o，u，i の三種が現れる。このうち，iは，VFとのcontrastによってMが独立し，一方，VはFに吸収された結果生じた母音である。曽摂と異なって，uを有する点，陽類にもiを生ずる点が，曽摂とのMVFの差を反映していると認められる。

(2)の止・深・臻摂は，次のように，開口のⅢ甲，Ⅲ乙をiで表し，-ĩ-が失われたかたちにo（あるいはe）が現れる点で共通している。

		Ⅰ	Ⅲ甲	Ⅲ乙
止摂	(支)		-i，(-e)	-i，(-e)
	(脂)		-i	-i，(-e)
	(之)		-i	-i，(-o)
	(微)			-i，(-e)
深摂			-i-	-i-，-o-
臻摂	(痕・真)	-o-	-i-	-i-，-o-
	(欣)			-o-

韻尾に着目するなら，これらのiは，Mの前舌性と前寄りのFに“挟撃”されて，Vの特徴を失ったものとみなすことができよう。

深摂および臻摂のⅢ甲，Ⅲ乙については先に例を掲げたので，以下には，止

摂と臻摂Ⅰの例を示す。

止
- Ⅲ甲（支） -i 知チ 池チ 離リ 児ニ 氏シ 支シ 此シ 卑ヒ 弥ミ 移イ 易イ……
  - -e 施セ 是ゼ
- Ⅲ乙（支） -i 奇キ 義ギ 議ギ 伎ギ 彼ヒ 被ヒ 疲ヒ 備ビ 靡ミ……
  - -e 戲ケ

- Ⅲ甲（脂） -i 棄キ 致チ 二ニ 利リ 私シ 至シ 自ジ 示ジ 鼻ビ 琵ビ 伊イ……
- Ⅲ乙（脂） -i 器キ 几キ 師シ 悲ヒ 秘ヒ 美ミ 眉ミ 魅ミ……
  - -e 飢ケ

- Ⅲ甲（之） -i 置チ 持チ 治ヂ 里リ 之シ 思シ 時ジ 字ジ 耳ニ 以イ 異イ……
- Ⅲ乙（之） -i 記キ 基キ 喜キ 紀キ 疑ギ 使シ 士ジ 意イ 医イ……
  - -o 己コ 其ゴ 欺ゴ （期ゴ）

Ⅲ乙（微） -i 幾キ 既キ 非ヒ 肥ヒ 飛ヒ 未ミ 味ミ 微ミ……
- -e 気ケ 希ケ 悕ケ 衣エ 依エ

臻 Ⅰ -o- 根コン 恨コン 恩オン

(2)の合口，すなわち，止・臻摂の合口は，次のように，-u-，-wi（止摂の牙喉音）としてMを保存し，あるいは合口性を失って，i，oの母音を示す。止摂に支・脂・之・微を区別した時期の痕跡を示すとみなされる -e，-o のかたちは存在しない。

止
- Ⅲ甲（支） -ui 累ルイ 羸ルイ 吹スイ 垂スイ 睡スイ 随ズイ 瑞ズイ……
- Ⅲ乙（支） -wi 危クキ 毀クキ 偽グキ 為キ 委キ……

- Ⅲ甲（脂） -ui 水スイ 出スイ 遂スイ 醉スイ 推スイ 誰スイ 追ツイ 唯ユイ 惟ユイ……
- Ⅲ乙（脂） -ui 衰スイ
  - -wi 亀クキ 置クキ 位キ……

Ⅲ乙（微） -wi 帰クキ 鬼クキ 貴クキ 韋キ 違キ 威キ 畏キ 慰キ……

臻 Ⅰ -o- 困コン 頓トン 鈍ドン 論ロン 尊ソン 存ゾン 本ホン 門モン 骨コチ 没モチ……
- -u- 村ジュン 忖ジュン 全フン

Ⅲ甲（諄） -u- 順ジュン 純ジュン 旬ジュン 淳ジュン 出シュツ……
- -i- 脣シン 輪リン 倫リン 潤ニン 律リチ……

Ⅲ乙（諄）　例字無し

Ⅲ乙（文）　-o-　文モン　問モン　聞モン　勿モチ　物モチ　弗ホチ……

-u-　君クン　訓クン　軍グン　群グン　分フン・ブン　紛フン　雲ウン　屈クツ　仏ブツ……

魚韻・幽韻を除いて，(3)の遇・流摂はⅢ甲，Ⅲ乙をuで表すのが基本である。

		Ⅰ	Ⅲ甲	Ⅲ乙
遇　摂	（模・虞）	-o, -u	-u, -iu	-u
	（魚）		-o	-o
流　摂	（侯・尤）	-o, -o-, -u	-u, -iu	-u
	（幽）		-e-	

魚韻は別として，(1)曽・通摂のように，Ⅲ甲，Ⅲ乙にoを存在させない。

遇　Ⅰ　-o　呼コ　故コ　五ゴ　護ゴ　都ト　渡ト　土ド　路ロ　蘇ソ　祖ソ…

-u　苦ク　奴ヌ　烏ウ　普フ　布フ　怖フ　部ブ　歩ブ……

Ⅲ甲（虞）　-u　兪ユ　喩ユ　諭ユ　臾ユ　主シュ　取シュ　殊シュ　輸シュ　樹ジュ…

-iu 柱チウ　注チウ　住ヂウ　乳ニウ……

Ⅲ乙（虞）　-u　句ク　俱ク　具グ　愚グ　付フ　膚フ　敷フ　父フ　無ム　雨ウ…

流　Ⅰ　-o　母モ　斗ト　後ゴ　篌ゴ　漏ロ……

-o-　溝コウ　闘トウ　逗トウ　樓ロウ(ル)(ロ)　走ソウ　藪ソウ……

-u　口ク　狗ク　頭ヅ　瓮ヌ　陋ル　某ム　茂ム　貿ム……

Ⅲ甲（尤）　-u　由ユ　油ユ　遊ユ　修シュ　手シュ　酒シュ　受ジュ　授ジュ　流ル　留ル……

-iu 昼チウ　稠チウ　忸チウ　柔ニウ……

Ⅲ乙（尤）　-u　丘ク　久ク　休ク　救ク　憂ウ　優ウ　有ウ　不フ　富フ　婦フ…

流摂の -o, -u は所謂単母音化である。quantity の問題を別にすれば，この単母音化は陰類の蟹摂と止・流摂に認められて，效摂には認められない。そして，その程度は一様ではない。例えば，止摂は合口を除くと，すべて単母音化している。流摂も単母音化するものが多いが，Ⅰに -ou 型，Ⅲ甲に -iu 型を有する。蟹摂の単母音化は，先に見たようにⅠ～Ⅳのすべてに認められるものの，単母音化を起こさない層の方が優勢である。

単母音化の問題に加えて，遇摂の -iu 型も難しい。原音の構造に照らして，例えば，「柱」には tju（チュ），「乳」には nju（ニュ）というかたちが許されるからである。恐らく，この遇摂の -iu は，流摂の -iu 型や通摂の -iũ 型に誘引されて生じた型であろう。

なお，魚韻，幽韻は次のように現れる。

魚　Ⅲ甲　-o　鼠ッ　驢ロ　餘ヨ　除チョ　如ニョ　諸ショ　書ショ　序ジョ　慮リョ……

　　Ⅲ乙　-o　居コ　去コ　巨コ　語ゴ　御ゴ　於オ　疎ソ　魚ギョ　初ショ　助ジョ…

幽　Ⅲ甲　-e-　幼エウ　幽エウ　謬ノウ

4

近年の日本字音研究は，文献上の事実がより詳しく明らかにされて，一段と詳密になり，原音との関係も一層緻密に考えられるようになった。それ自体はたいへん好ましいことに違いないが，それで満足できる状態にないことも，また確かなようである。日本字音は，単なる中国語音の投影としてのみ存在するのでなく，日本語音への融和の process で，ある種の類型を生み，そうした類型間の相関の上に成り立っているという一面を有するからである。

このような観点に立って日本呉音の全体を眺ると，“核母音”の現れ方にも一定の傾向が存在し，“核母音”から見て，-ng′～-k′ と -ng～-k は類似した行動を示し，また -m～-p と -n～-t も行動を等しくするといった点が一層鮮明になる。無韻尾および陰類の諸摂について言えば，外転では，-ɑ（果・仮摂）が -ng′～-k′，-ng～-k と似た行動をとり，-u（效摂）が -m～-p，-n～-t と似た行動を示すのに対して，内転では，-i（止摂）が -m～-p，-n～-t と同様の行動を示し，-ɑ（遇摂）と -u（流摂）が近似したあり方を示している。こうした面でも，蟹摂はひとり特殊である。

小論の立場はまた，例えば，曽摂入声の -iki は，通摂の入声に認められる「竹チク」のごとき -iku 型との相関において存在する型であり，遇摂の -iu も，流摂の -iu 型や通摂の -iũ 型との matching によって生じた可能性が強い，といった見方を可能にするであろう。

このような角度からの部分的・個別的事例の解釈は，小論がその出発点である。

〔注〕 小論は，昭和60・61年度科学研究費補助金（課題名「日本呉音の歴史的研究」）によってなされた研究の一部である。

（注）

1) 河野六郎「朝鮮漢字音と日本呉音」（1978，『河野六郎著作集』3所収）など。

2) 韻目は平声で代表させる。以下も同じ。

3) 甲・乙の区別のないⅢはⅢ甲に含める。以下も同じ。

4) 河野六郎『朝鮮漢字音の研究』(1964～67,『河野六郎著作集』2所収)

5) 有坂秀世「『帽子』等の仮名遣について」(1942,『国語音韻史の研究』所収)

6) 河野六郎「『日本呉音』に就いて」(1976,『河野六郎著作集』2所収)

7) 林　史典「日本の漢字音」(1982, 中央公論社『日本語の世界』4所収)